



日本古代ニ於ケル人民ノ移住ニ就キテ(其五)

内田, 銀藏

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 5(2):209-218

(Issue Date)

1908-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051290>



日本古代ニ於ケル人民ノ移住ニ就キテ（其五）

京都文科大學教授

文學博士 內田 銀藏

第五 所謂日本種族ニ屬スル人民ノ移住ノ一

所謂日本種族^{ヤマト}ノ人民ノ移住ニ關スル研究ハ、自カラ分レテ二トナル。第一ハ彼等ハ如何ナル因由アリテ此ノ大八島國ニ來住スルニ至リタルカト云フコトニ關スル研究ニシテ、第二ハ既ニ此ノ大八島國ニ來住セシ後、如何ニ其ノ住所ヲ移セシカト云フコトニ就キテノ研究ナリ。此ノ二者ノ中、第一ハ一層根本的ニシテ、且研究ノ興味甚ダ多キモノナレドモ、今日ニ於テハ之ヲ明ニスルコト至テ難シ。徵證備ハラズ、事蹟茫漠トシテ、捕捉シ難キニ、強テ說ヲ立ツルトキハ、牽強附會ニ陥リ、架空ノ譏ヲ免ル、コト能ハザルベシ。マタ此ノ方面ノ論議ノ爲メニハ、本誌上ヨリモ、他ニ一層適當ナル場所アルベシト考ヘラル。故ニ茲ニハ殆ンド全ク之ヲ省略シ、專ラ第二ノ問題ニ就キテ說ク所アラントス。

但シ第二ノ問題ヲ論ズルニ當リ、順序トシテ、先ヅ第一ノ問題ニ關聯シ一應述べ置クヲ要スル事柄アリ。ソハ他ナシ初メ日本種族ノ人民ガ此ノ國ニ來ルヤ、先ヅ單ニ或ル一地點ニ於テノミ到着定住シ、其ノ地點ヨリ各地方ニ分レ移ルニ至リタルモノニハ非ルコト即チ是レナリ。蓋シ予輩ガ日本種族ト汎稱スル優等種族ハ其ノ本來ノ故土、若シクハ中間ノ居住地ヨリシテ前後幾回ニモ此ノ大八島國ニ降臨シタルモノ、如ク、而シテ其ノ降臨シタル地點ハ實ハ數多ニシテ即チ頗ル廣キ地帶内ノ所々ニ來着定住シタルモノ、如シ。暫ク古傳ニ見エ居ル所ノミニ據ルモ、素戔鳴尊ハ、其ノ子五十猛神ヲ率キテ、先ヅ新羅國、即チ韓半島ノ東南端ニ降り居ラレシガ、此ノ國ニハ吾レ居ルコトヲ欲セズトテ舟ニ乘リテ東ニ渡リ出雲國ニ到着セラレタリトイフ。又天照大神ガ是レ爾ガ兒ナリトテ素戔鳴尊ニ授ケ給ヒシトイフ三女神ハ筑前ノ方面ニ降臨シテ宗像大神トシテ鎮座シ給ヘリトイヘリ。今ノ筑前國宗像郡宗像神社即チ是レナリ。蓋シ九州ノ北岸ハ、早ク日本種族ノ人民ノ來リ住セシ地帶中ニアルヤ疑ナキナリ又瓊瓊杵尊ノ降臨ニ關係アル古傳説ニ徴シテモ

此ノ大八島國ノ經略ハ決シテ一朝一夕ノコトニ非ズ、所謂日本種族ノ來着點ハ常ニ或ル一地方ニノミ限局シ居ラザリシコト自カラ察セラルベシ。而シテ今ニ遺レル神話傳説ニハ所謂日本種族來住ニ關スル事實ノ或ル部分ノミガ、至テ不完全ニ傳ヘラレ居ルニ過ギズトスレバ、此等神話傳説ニ多少其ノ面影ヲ留メ得シモノ、外全ク湮滅ニ歸セシ來住ノ事實前後幾クタビモコレアリシナルベキコト、蓋シ疑ヲ容レザル所ナリ。從テ日本種族ノ此ノ國土内ニ於ケル移住モ單ニ或ル一ノ地點ノミヨリ發源セルニハ非ズ、早クヨリ幾多ノ起點アリテ、其ノ進行ハ、古史ノ表面ニ顯ハレ居ル所ニヨリテ想像セラル、ヨリモ、遙ニ多樣且復雜ナルモノナリシナラント思ハル、ナリ。

其ノ種々ナル起點ヨリシテ如何ナル道筋ニ由リ、如何ナル順序ニテ日本種族ノ人民ハ國內ノ各地ニ進入シ、之ニ居住スルニ至リタルカ、今之ヲ詳悉スルコト能ハズト雖、例ヘバ大和地方ノ如キ風ニ出雲方面トノ間ニ交通ノ存スルアリ。先ヅ出雲ヲ根據トセル種族ハ早ク大和ノ地ニモ來住シ、頗ル其ノ勢力ヲ樹立スルコトヲ得

タルモノ、如シ。故ニ大三輪神ハ早ク大和ノ三諸山ニ鐘座シ、特ニ國人ノ尊崇ヲ受ケ、此ノ神ヲ以テ祖神トスル大三輪君ハ上古ノ世、大和ニ於ケル名族トシテ著ハレタルナリ。又神武天皇ノ東征ニ先キダチ天ツ神ノ種族ナル饒速日命、コヽニ來リテ止マリ住シ、土酋長髓彥之ヲ奉戴セシコト、人ノ能ク知ル所ナリトス。日本紀神武天皇三十一年ノ條ニ曰ク、昔伊弉諾尊目此國曰、日本者浦安國、細戈千足國、磯輪上秀眞國、復大已貴大神目之曰、玉牆內國及至饒速日命、乘天磐船而翔行大虛也、睨是鄉而降之。故因目之曰虛空見日本國矣ト。此ノ文ヲ玩味スルニ、所謂日本種族ノ大和來住ハ前後少クトモ數次アリ、其ノ由テ來ル所尙シキコト、マタ髣髴ノ間ニ之ヲ認メ得ベキガ如シ。

安寧天皇ノ皇子師木津日子命ニ二王子アリ、一ハ伊賀地方ノ稻置ノ祖トナリ、一ハ淡路ノ國ニ居リ給ヒシトイフ。是ノ古事記ノ傳フル所ニシテ、皇胤ノ早クヨリ次第ニ各地ニ分レ住ミ給フニ至リシコトヲ見ルベキ一例ナリトス。同ジク古事記ニ孝靈天皇ノ皇子大吉備津日子命、及若建吉備津日子命ハ、針間(播磨)ヲ道口トシテ吉

備國ヲ平定シ、大吉備津日子命ハ吉備上道臣ノ祖トナリ、若建吉備津日子命ハ吉備下道臣等ノ祖トナリ給ヒシコトヲ傳フ。此ノ如ク國土ヲ經略シ、其ノ地平定ニ歸スルヤ、其ノ經略ノ任務ニ當ラレタル皇族及其ノ麾下ノ將士等ハ多ク留マリテ其ノ地ニ住シ、終ニ土着シテ其ノ子孫、其ノ地方ニ繁衍スルニ至ルハ極メテ自然ノ事柄ニシテ、同様ノ事例ハ前後多クノ場所ニ於テ存シタルコトナルベシ。サレハ皇威ノ伸張、國土經略ノ進歩ニ伴隨シテ――民族ノ膨脹、人民移住ノ事實アリ、其ノ結果トシテ從來天然ノ儘ニ委セラレタル土地次第ニ開拓セラレ、村落新ニ發生シ國ノ富源漸ク開發セラル、ニ至リシコト固ヨリ言ヲ俟タザル所ナリ。

一地方ヨリ他ノ地方ニ移住セルモノ、例トシテハ、彼ノ讚岐國寒川郡ノ豪族佐婆部、首ノ祖先ガ仁德天皇ノ御世ニ周防ヨリ讚岐ニ遷レリト云フ類ヲモ舉グルコトヲ得ベシ。是レハ續日本紀卷四十、延暦十年十二月丙申ノ條下ニ記スル所ナリ。播磨風土記ニハ地名ノ由來ニ就キテノ説明中ニ於テ上古人民移住ニ關スル幾多ノ話説ヲ載ス。今其ノ二三ヲ錄センニ、左ノ如シ。

飾磨郡小川里豐國村 所以號豐國者、筑紫豐國之神在於此處、故號豐國村。

同郡英保里 右稱英保者、伊豫國英保村人到來、居於此處、故號英保村。

同郡美濃里 右號美濃者、讚伎國彌濃郡人到來、居之、故號美濃。

揖保郡狹野村 別君玉手等、遠祖本居川內國泉郡、因地不便、遷到此土、仍云此野

雖狹、猶可居也、故號狹野。

同郡浦上里 古所以號浦上者、昔阿曇連百足等、先居難波、浦上、後遷來於此、浦上

故因本居爲名。

地名ノ解釋ニ關スル傳説ニハ或ハ荒唐無稽、或ハ牽強附會、信ヲ措クニ足ラザルモノ多シ。從テ其ノ取捨ニハ慎重ナル注意ヲ要ス。玆ニ舉ゲタルモノ、中ニテモ、豐國村ノ解釋ノ如キハ、果シテイカバアラン、或ハ後人ノ想像説ニハ非ズヤト疑ハル。浦上ノ地名、其ノ住民ノ故郷ノ地名ニ因テ起レリト云フモ、遽カニ首肯シ難シ。然レドモ其ノ住民モト難波ノ地ヨリ移リ來レリトイフハ、蓋シ何等カノ根據アルコトナルベシ。英保里ノ條下ノ伊豫國ハ恐ラクハ伊賀國ノ誤ナラント云フ。美濃里ハ讚岐國彌濃郡ノ人ノ來リテ住セシ地ナルヨリ、此ノ名起レリトイフハ、尤ラシク聞ユ。

是レハ美濃トイフ地名アレハ直チニ美濃國ヨリノ直接移住アリシ地ナランナド
ト輕卒ニ臆測スベカラザルコトヲ示ス好適例ナリ。狹野、村ハモト和泉ヨリノ移住
者ニヨリテ開カレタリトイフモ、古傳ニシテ、先ヅ信ヲ措テ可ナラント思ハル。川内國
泉郡ト
イヘルハ、和泉國、和泉郡、モト河
内ニ屬セシヲ以テカクイヘルナリ。之ヲ要スルニ風土記ノ所傳、悉ク輕信スベキニハ非ズト雖、
其ノ中ノ或ルモノハ探テ以テ考據ニ資スベシ。而シテ播磨ノ如キ諸方ヨリノ移民
前後相踵デ來住スルニヨリテ土地次第ニ開ケタルコト之ニ由リテ自カラ想察セ
ラルベキナリ。他ノ諸國モ亦多ク同様ナルベシ。

古語拾遺、神武天皇ノ御筆蹟ヲ叙セル條下ニ、

仍令_ニ天_ニ富_ニ命_ニ奉_ニ日_ニ鷲_ニ命_ニ之_ニ孫_ニ求_ニ肥_ニ饒_ニ地_ニ遣_ニ阿_ニ波_ニ國_ニ殖_ニ穀_ニ麻_ニ種_ニ其_ニ裔_ニ今_ニ在_ニ彼_ニ國_ニ當_ニ大_ニ嘗_ニ之_ニ
年_ニ貢_ニ木_ニ綿_ニ麻_ニ布_ニ及_ニ種_ニ々_ニ物_ニ所_ニ以_ニ郡_ニ名_ニ爲_ニ麻_ニ殖_ニ之_ニ緣_ニ也_ニ。

天_ニ富_ニ命_ニ更_ニ求_ニ沃_ニ壤_ニ分_ニ阿_ニ波_ニ齋_ニ部_ニ率_ニ往_ニ東_ニ土_ニ播_ニ殖_ニ麻_ニ穀_ニ好_ニ麻_ニ所_ニ生_ニ故_ニ謂_ニ之_ニ總_ニ國_ニ穀_ニ木_ニ所_ニ生_ニ
故_ニ謂_ニ之_ニ結_ニ城_ニ郡_ニ。古語、麻謂フ之ヲ總ト也、今
爲ニ上總下總ニ國ニ是也。阿_ニ波_ニ忌_ニ部_ニ所_ニ居_ニ便_ニ名_ニ安_ニ房_ニ郡_ニ。今安房、
國是ナリ也。天_ニ富_ニ命_ニ卽_ニ於_ニ其_ニ
地_ニ立_ニ太_ニ玉_ニ命_ニ社_ニ今_ニ謂_ニ之_ニ安_ニ房_ニ社_ニ故_ニ其_ニ神_ニ戶_ニ有_ニ齋_ニ部_ニ氏_ニ。

ト記セリ。是レモ地名ノ説明ハ、悉ク當レリヤ否、尙ホ考慮ヲ要スルモノアリ。又此ノ傳説ニテハ齋部氏ガ四國ナル阿波ニ移住セシモ、マタ其ノ東國ニ移リテ今ノ安房ノ地等ヲ拓キシモ、共ニ天富命ノ時、即チ神武天皇ノ御世ノ頃ノコトナルガ如ク見ユレドモ、其ノ總テガ果シテ神武創業ノ初ニ當リ同時ニ遂行セラレタルヤ甚ダ疑ハシ。恐ラクハ東國ヘノ移民ハ稍後ノコトナリケムヲ、合セテ早ク同時ニ仕遂ゲラレタルモノ、如ク傳ヘタルモノナルベシ。此ノ如ク此ノ古語拾遺ノ記事モ其ノ儘ニハ採リ難シト雖、齋部氏ガ一方ニ於テハ、四國ノ阿波ニ移住シ、他ノ一方ニ於テハ、マタ東國ナル安房等ニモ移リテ其ノ地ヲ開キタリトイフ大體ノ事實ハ根據アルコト、思ハル。是レ以テ上古ノ世、交通尙ホ頗ル不便ナリシニモ關セズ、人民沃壤ヲ求メ、比較的隔遠ノ地方ニ移ルヲ難シトセザリシコトヲ徵スベキナリ。此ノ見解ヲ確ムル爲メニハ、同ジク建比良鳥命タケヒラトリノ後裔ニシテ、或ルモノハ出雲國造トナリ、或ルモノハ无邪志ムサシ(武藏)國造トナレリトイヘル類ノ傳説モ亦一顧ノ値ナキニ非ルベシ。

上古ニ於ケル國內移住ノ原因ニ就キテハ、古史ニ於テ考據ノ資料ヲ見出スコト難シ。依テ暫ク事理ヲ以テ之ヲ判スルニ、其ノ事情ハ場合ニヨリテ種々異リ、總テニ就キテ一概ニ論ジ難キモノアラント考ヘラル。例ヘバ或ル所ニテハ、洪水汎濫ノ患アリ、或ル所ニテハマタ水利ニ乏シクシテ灌漑ノ便ニ乏シキ等ヨリ、此等ノ不便ヲ避ケントテ、人民任意ニ他ニ移レルガ如キコトモアルベク、又外敵ヲ防禦シ邊疆ヲ充實センガ爲メニ、勸誘シ若シクハ強制シテ移住セシメタルガ如キコトモ。必ラズヤ早クヨリシテコレアリシナラント推測セラル、ナリ。又地形ノ變遷、飢饉外征内亂、及徭役等モ直接若シクハ間接ニ人民移住ノ原由トナリシナラント思ハルレドモ、此等ノ一々ニ關スル例證ヲ見出シ難キハ甚ダ遺憾ナリトス。但シ移住ノ最モ普通ナル主因ハ、蓋シ人口ノ増殖ニ外ナラザリシナルベシ。上古ノ世ニアリテハ、疾疫戰爭等アリシニモ關セズ人口ノ増殖頗ル速ナリシナランコトハ、疑ヲ容レザル所ニシテ、而シテ人口ノ漸ク増殖スルニ從ヒテ、從來存在セル村落ハ次第ニ膨大スルト共ニ、餘レル人口ハ舊村ノ附近ニ更ニ新村ヲ立テ、又ハ他ノ地方ニ移住シテ新ニ聚落ヲ形成スルニ至ル、コレ一般ノ趨勢ナリシナラン。即チ人口ハ比較的稠密トナ

レル地ヨリ次第ニ僻遠未開、人煙稀疎ノ域ニ向ツテ放散移動スル傾向アリシヤ疑ナキナリ。又上古ノ世特ニ其ノ終リニ近キ頃ニ於テ人民ノ移住ヲ致セル一ノ特別ナル因由トシテハ、朝廷若シクハ豪族ガ屢々有望ノ地ヲ點定シテ之ガ開墾ヲ企テ屯倉^{ミヤク}苦シクハ田莊^{タドコロ}ヲ置キ、諸國ノ人民ヲ徵集移置シテ之ガ耕作ニ從事セシメシコトヲ遺却スベカラズ。之ニ就キテハ尙ホ次ニ少シク之ヲ詳論セン

(未完)